

# 不登校は 終わったのか？

『不登校は終わらない』をめぐる再考対談

貴戸理恵 × 山下耕平

(きど・りえ) 1978年福岡県生まれ。7歳から12歳まで学校に行かず家で過ごしたのち、中学・高校・大学に行く。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学。不登校の当事者経験と社会学・教育社会学・フェミニズムをベースに「子ども・若者と社会とのつながり」を研究している。現在は関西学院大学助教。著書に『不登校は終わらない』(新曜社／2004)、『増補・不登校、選んだわけじゃないんだぜ!』(常野雄次郎氏との共著、イーストプレス／2012)、『「コミュニケーション能力がない」と悩む前に』(岩波ブックレット)など。

(やました・こうへい) 1973年、埼玉県生まれ。大学を中退後、フリースクール東京シューレスタッフを経て、1998年、『不登校新聞』創刊時から、2006年6月までの8年間、編集長を務めた。また、2001年、フリースクール・フォロ設立時より、同事務局長を務める。2006年より、若者の居場所コムニタス・フォロを立ち上げ、コーディネーターをしている。著書に『迷子の時代を生き抜くために』(北大路書房／2009)。

## はじめに

## 山下 耕平

貴戸理恵さんが『不登校は終わらない』（新曜社）を出したのは、2004年11月のことだ。立て続けに2005年1月に出された『不登校、選んだわけじゃないんだぜ！』（常野雄次郎さんと共著／理論社）と合わせて、この2冊は不登校運動を批判した本として、物議をかもした。しかし、重要な問題提起があったにもかかわらず、不登校運動を中心的に担ってきたと言えるフリースクール東京シューレは、著者と出版社に抗議するという対応をし、議論はまったく不毛に終わった。というよりも、議論そのものが成り立っていなかったと言える。

私自身は、2000年3月まで東京シューレのスタッフをしており、当時も、不登校運動の言説の一翼を担ってきた『Fonte』（旧『不登校新聞』）の編集長をしていた（ついでに私の立場を明らかにしておく、私自身に不登校経験はないが、大学を中退後、東京シューレのスタッフとなり、1998年『不登校新聞』創刊時から編集長を務め、2000年4月から大阪に移り、2001年にフリースクール・フォロを立ち上げ、2006年からはフォロで若者の居場所「コムニタス・フォロ」を開いている）。

当時、私は『不登校は終わらない』をめぐる騒動に直接は関わっていなかったが、常野雄次郎さんからは『Fonte』紙上で議論するよう呼びかけをいただいた。にもかかわらず、編集長であった私は、それに応えられなかった。それは私の認識と力量が不足していたというほかない。

その後、私は2009年に『迷子の時代を生き抜くために』（北大路書房）という本を出し、私なりに、貴戸さんや常野さんの問題提起に対し、応えたつもりだ。ちょうど2009年に、貴戸さんが関西学院大学に赴任し、近くに来られたこともあって、何度か対話を重ね、昨年（2011年）6月から、フォロで“づら研”（生きづらさからの当事者研究会）をいっしょに始めている。

しかし、その後の不登校運動の推移を考えてみても、あのとき、貴戸さんたちの批判が受けとめられなかったことが、とても大きな禍根を残しているように思えてならない。時代はますます市場原理がすみずみまで浸透し、子ども若者は市場によって選択され、使い捨てられる存在となり、そのために果てしのない競争を強いられている。学校に行く行かないにかかわらず、子ども・若者の生きづらさは底なしに深くなっている。また、不登校という問い自体が、見えにくいものとなって、不登校運動に関わってきた人たちも、もやもやとした視界の悪さにとまどっているように思う。しかし逆に、いまだからこそ見通せることもある。いま一度、『不登校は終わらない』について、きちんと議論しておきたい。そう思い立ち、貴戸さんに対談を持ちかけた。

この対談が、きちんと問題を掘り起こし、次につなげていく議論となっていくことを願っている。対談は2012年5月9日、フォロのスタッフ同席で、フォロにて行なった。

2012年7月

\*注：2010年、理論社が倒産したが、2012年3月、イーストプレスから増補版が復刊している。

## ざっくりと不登校の歴史を

山下：まずは、ざっくりと不登校の歴史をふりかえってみたいと思います。そもそも不登校とは何かを考えたとき、1950年代半ばごろ、治療対象としてくり出された問題だということがあると思います。それまでの経済的理由や病気を理由とした長期欠席ではなく、とくに目立った理由が見あたらないのに学校へ行かない子どもたちが出てきた。そういう現象に対して、英米の精神医学概念を輸入して、スクールフォビア＝学校恐怖症という診断名がつけられたわけですね。母子分離不安など、家庭の養育環境を理由とした神経症の問題だとされた。

### ・精神医療の流れ

精神科医の高岡健は、不登校に対する精神医療の流れを、1960年代に登校拒否の精神医学化が行なわれ（鷲見たえ子、佐藤修策ら）、1970年代から反精神医学化されたものの（個人病理ではなく社会病理とみる見方。渡辺位ら）、80年代に入って、再び精神医学化されてきた（稲村博ら）と指摘しています。88年には、稲村博の「早期治療しないと30代まで尾を引く」とした論文が朝日新聞の1面トップで報道され、親の会関係者が緊急集会を開くなど、大問題となったことがありましたね。80年代半ば以降、親の会やフリースクールなど不登校の当事者運動が広がっていき、90年代以降、不登校そのものが精神病理として扱われることは減ったと言えます。しかし、90年代末ごろからは替わって発達障害がクローズアップされ（杉山登志郎ら）、また、ひきこもりが治療対象としてカテゴライズされてきた（斎藤環ら）。

### ・行政の動き

文部省の統計（学校基本調査）は1966年からですが、74年度まで不登校数は減っていたのが、1975年度から2001年度まで27年間にわたって急激に増加して、この10年はずっと横ばいですね。2009年度の小中学校の不登校数は12万2250人（小学生2万2327人、中学生が9万

9923人）、割合にすると、小学生の0.23%、中学生の2.77%になります。

行政の動きをみると、文部省が1983年に『生徒の健全育成をめぐる諸問題—登校拒否問題を中心に—』という手引きを発表し、登校拒否を「神経症、消極的な性格、精神病の初期症状」として、本人の性格や養育者の問題だという見解を示しています。それが、当事者運動の影響もあってか、1992年には「誰にでも起こりうる」と認識転換しますね。同時に、フリースクールなどへの出席を学校への出席にカウントするとか、通学定期券の適用を認めるとか、民間団体の存在を認め始める。

95年からはスクールカウンセラーを全中学校に配置しはじめますが、この影響も大きいと思います。不登校の問題が再び心理化され、教師が受けとめて考える問題というよりも、心理の専門家にあずける問題になったと言えるかもしれません。早々に医療や心理の問題として振り分けられ、精神医療にかかる子どもの数は、ものすごく増えています。過剰医療、とくに向精神薬の多剤多量投与の問題など、年々、深刻になっているように思います。

2003年の『今後の不登校への対応の在り方について』という答申では、「早期発見・早期対応」「働きかけることの重要性」が呼びかけられ、並行して各自治体で不登校削減の数値目標が設定されました。このころ、大阪でも太田房江知事（当時）が「不登校を3カ年で半減させる」と打ち出して、私たちが抗議運動を展開したことがありました。

一方、2000年代に入ってから、千葉県、長野県、川崎市など各自治体で民間との連携が増えます。2005年には文科省が「民間団体・施設との積極的な連携」を通達し、福岡県（06年度～）、京都府（07年度～）、福井県（10年度～）、札幌市（12年度～）で「フリースクール支援事業」が始まっています。

それから、2004年以降、構造改革特区で不登校児を対象とした学校の設立が始まります。株式会社やNPO法人でも学校を設立できることにはなったのですが、特区学校63校のうち、NPO法人で設立されているところはゼロです。大半は

株式会社か自治体が設置した学校で、シュタイナー学園や東京シュレー葛飾中学校など、オルタナティブスクールと言えそうな学校は、私の知るかぎり3校でした（いずれも学校法人として設立されている。このうち湘南ライナス学園は経営難で2011年度で閉校）。

このへんから、フリースクールの位置づけがよくわからなくなってきました。

#### ・当事者運動

当事者運動の動きも、かいつまんでふり返っておきたいと思います。児童精神科医の渡辺位が1973年に希望会という親の会を始めたのが、当事者運動の嚆矢と言ってよいかと思います。不登校運動というと、80年代半ばからの動きが大きいです。前史に10年はあるわけですね。『登校拒否・学校に行かないで生きる』（太郎次郎社1983）という本が希望会10周年記念として刊行されていますが、この本なんかを読むと、当時の登校拒否をめぐる状況が、いかにすさまじかったか、よくわかります。80年代半ば以降、親の会が全国に広がって、東京シュレーを始め、親の会を母胎にしたフリースクールや居場所がつくられていきます。フリースクールには、不登校運動からではなく、欧米のフリースクールやオルタナティブスクールを研究して、自由な教育をやっていこうという流れもあります。いずれにしても、フリースクールは90年代以降、各地に広まっていきますが、先ほど申し上げたように、一方では発達障害やひきこもりの問題がクローズアップされ、一方では塾産業が「フリースクール」を始めたり、学校行政も「柔軟化」してきたり、良くも悪くも不登校という現象は見えにくいものになりましたね。最近ではサポート校化するフリースクールも出てきてます。

貴戸：フリースクールで高校卒業資格を取れるということでしょうか？

山下：フリースクールで取れるわけではないですね。あくまで通信制高校の卒業資格です。東京シュレーは「サポート校ではなく通信制高校の学

習センターです」と言っているようですが、実態としてはサポート校と何がちがうのか、よくわかりません。

#### ・矯正施設での事件

もうひとつ、忘れてはいけないのは、矯正施設における事件ですね。たとえば戸塚ヨットスクールは「スパルタ訓練で脳幹を鍛えれば不登校など情緒障害は治る」という持論で、1979年から82年にかけて5人を死にいたらしめ刑事罰に問われました。ほかにも、不動塾事件（87年／埼玉）、奄美大島の登校拒否追放運動（87年～90年代初頭）、風の子学園事件（91年／広島）など、80年代はすさまじい事件が続発しています。私自身は92年から関わっているのですが、親にだまされて矯正施設に連れていかれて、命からがら身ひとつで逃げ出した子どもの話など、いくつも聞きました。

90年代後半以降、そういう事件は聞かなくなっていたんですが、2000年代に入って、ひきこもりをターゲットにした長田塾などマッチョな施設がマスコミにもてはやされるようになり、アイ・メンタルスクール事件など、致死事件を含め、矯正施設での事件がいくつかありました。アイ・メンタルスクール事件は、入寮5日目の男性（当時26歳）が死亡した事件で、男性は家族の依頼によって、自宅から手錠や鎖を使って拉致監禁され、打撲による外傷性ショックで死亡してるんですね。

戸塚ヨットスクールも、ずっと続いているんですね。戸塚校長は懲役6年の実刑判決を受けたものの、2006年に出所して、現役バリバリです。校長出所後の2006年以降も、スクール生が自殺などで3名死亡、1名が自殺未遂で重傷を負っています。

不登校やひきこもりを「治す」という名目で、暴力が公然とふるわれているのは、ほんとうに許しがたいことです。

#### 『不登校は終わらない』が出たころは

山下：こうしてざっくりと歴史をふりかえってみると、ジグザグを描いていたり、“歴史はくり

返す”という面もあるのですが、個人病理、家庭病理と捉えられていた問題を、学校や社会のあり方を問うというかたちで当事者運動が展開されてきたということは言えると思います。

さて、貴戸さんの書かれた『不登校は終わらない』ですが、これは2004年に出された本ですね。当時は、フリースクールや親の会が広がって、「不登校という生き方もある」「不登校を選んだ」といった語り方が、一定の説得力を持っていたわけですね。もちろん、細かくはいろいろちがいもあるのですが、そのあたりは後で触れるとして、大づかみに言えば、学校の価値観を相対化するフリースクール的な言説が力を持って、やや退潮してきたころに出た本だと言えると思います。いまふり返って、貴戸さんが、この本において何をしようとしたのか、うかがっていきたいと思いますが、いかがでしょう。

## 貴戸の個人史

**貴戸：**『不登校は終わらない』が出たとき、私は26歳の大学院生でした。当時の私は、いまの私とは距離のある存在です。その距離を逆手にとって、当時の私をいまの私の視点で分析してみるところからはじめたいと思います。2004年の貴戸はどこにいたのか、ということですね。

私は1978年生まれで、1985年に小学校に入学して、1年生の夏休み明けに学校に行かなくなり、小学校6年生までほとんど学校に行くことなく家で過ごしました。フリースクールや居場所に通うことはありませんでした。その後、中学校は中高一貫の私立女子校に入り、3年間通いました。でもその学校がいやで、高校は地元の県立高校に入りなおし、サボりながらも卒業して、AO入試で大学に入学しました。そこで社会学という学問に出会ったんですね。卒業後は大学で事務の仕事をしていたんですが、1年で辞めて大学院に進学して、『不登校は終わらない』のもとになった修士論文を書きました。

こんなふうに貴戸の個人史を追ってみてわかるのは、不登校に関して「80年代に当事者経験を持ち、2000年前後に研究の視点を得た人」だということです。先ほど紹介してくださったように、

90年代半ばごろから、不登校に対する扱いは変化していきました。92年の認識転換を経て、学校外の場で学び育つ子どもの権利もそれ以前よりは認められるようになってきた。でも私の原点になった不登校経験は、そういう転換が起こるより以前なんですね。

不登校だったとき、私はずっと家にいて、1日中ファミコンやったり、マンガ読んだり、寝たりしていました。母はとても悩んでいました。両親は、順当に人生を歩んできた人たちだったので、長女がいきなり学校に行かなくなって衝撃を受けたと思うんですね。すったもんだしながら、それでも割合に転換は早くて、母はシュレーの本もよく読んでいたので、早いうちから「家のなかで子どもが過ごすことを認める」と言っていました。88年、朝日新聞の「登校拒否症は対応しないと無気力症になって30代まで尾を引く」という記事に対する緊急集会があったときには、両親で参加していました。私はそういう、不登校であるというだけでものすごく自己否定をしないとイケなかった時代の、不登校経験者なんですね。

**山下：**親がわかってくれたからって、そんなに解放されるものではない、と。

**貴戸：**親の理解があれば家庭のなかで居心地がよくなりますけどね。不登校を否定する社会からの圧力は大きかったですから、その空気はひしひしと感じていたように思います。10歳に満たない子どもが、不登校であるというだけで、「私の将来はお先真っ暗だ、このままいけば絶対にどんな仕事にも就けないし、友だちの輪にも入れないだろう」と本気で考えていたんです。いま思うととんでもないですね。「私はよい存在だ、この世界に受けいれられている、これからもきっとこの世界のなかで幸福に生きていける、だから安心していいんだ」という感覚は、子どもが育つうえで一番の基本でしょう。ただ学校に行かないだけで、そんなに大切なものが奪われてしまうなんて、もし自分の娘がそうなったらと思うと、親として絶対に許せない事態です。だけど当時の私にとって、自分がダメな子どもだというのはあまりにも、空

気のように当たり前の中で、「だって学校に行っていないんだから」と、それはもう根深く思っていました。

### 不登校運動の普遍性

貴戸：こういう不登校に対する否定的な空気は、80年代までの社会のあり方に裏書きされていたと思います。おおざっぱに言ってしまえば、「いい学校を出ていい企業に勤める（人の妻になる）、そうすれば幸せになれる」ということが、かなり一般的に信じられていた。不登校はたんに「学校に行かない」だけじゃなく、社会を貫くそういう価値観から外れる、という意味を持ってしまっていたわけですね。そういうなかで、不登校運動は不登校の子どもや親の権利主張をする延長上で、「この社会のあり方を根本から考え直す」という普遍的な課題に取り組んでいたのではないのでしょうか。たとえば、女性運動や障害者運動、環境運動などともつながりながら、「経済成長し続けるのがいいことなのか、いろんなどころにひずみが出てはいないか、もっと持続可能な社会を目指すべきなのではないか」という問いを発していましたね。

オーストラリアのアデレード大学で、ワンさんという研究者が日本の不登校運動を分析した博士論文を発表しています(Reframing Futoko(School Non-Attendance)in Japan - A Social Movement perspective/So Fei Won/2007)。この論文で、不登校運動は日本でもっとも成功した市民運動のひとつだと評価されています。不登校運動は、不登校だけじゃなく他の社会問題にも関心の深い“不登校市民”というべき存在によって担われた、と。たしかに、そういう側面があったと思うんですね。

私の母も、不登校の親の会に参加していただくだけではなくて、琵琶湖の汚染問題に関わったり、フェミニズムへの関心も持っていた人でした。合成洗剤を使わないでパーム油で洗濯するもんだから、制服のブラウスなんか黄ばんでいて、中学生のころはすごくいやだった(笑)。それはともかく、私はフリースクールなどに通っていませんでしたので、不登校運動に触れていないと思われることもあるんですが、そんなことはないんですね。当

時の不登校運動って、そういう名前を自覚的に使うかどうかは別として、もっとずっとすそ野の広いものだったと思いますから。

そういうかたちで不登校なり不登校運動なりを体感したことが、私の当事者経験のスタート地点にはあります。

山下：少し補足をすると、80年代までの不登校は、“首縄時代”とも言われますね。首に縄をつけてでも学校へ連れていった時代です。行きしぶって柱にしがみつくと子どもの指を1本1本ひきはがして連れていったとか、ほんとうに痛ましい登校強制が、当たり前のように行なわれていた。別の言い方をすれば、“激痛時代”と言ってもよいと思います。激痛だと痛くてやってられないから、生活を根本的に見なおそうと思う。でも、鈍痛だと薬を飲みながらでもガマンしてがんばってしまったりする。いまは“鈍痛時代”。逆説的だけど、鈍痛化したことで、根本的な問い直しをしにくくなっている面はあると思います。もちろん、激痛時代がよかったわけじゃないけど、激痛だったからこそ、普遍的な問いに結びついていた面はあるでしょうね。

### 90年代に何が起きたのか？

貴戸：まさにそここのところですね。先ほどお話ししたように、私はそういう80年代に不登校を経験し、2000年前後に思想形成したわけですが、そのあいだの90年代に何が起こったかを考えてみたいと思います。

私のバックグラウンドになっている学問は社会学です。『不登校は終わらない』を書いたとき、とくに大きな影響を受けたのは、フェミニズムと教育社会学でした。フェミニズムから学んだのは、「当事者として、自分のことを研究してもいいんだ」ということに尽きます。ここではもう一つの、教育社会学の知見について、おもにお話ししたいと思います。

背景として、子ども・若者が「社会に出ていく」ということに関して、90年代の変化はものすごく大きかったということがあります。いわゆる「失われた10年」というやつですね。

まず、バブル崩壊以降、若者の雇用劣化が進み、失業率や非正規雇用率などが大幅に増えました。欧米より低いと評価されてきた若年失業率(15～24歳)は、80年代から90年代初頭まで4～5%代ですが、2000年代初頭には10%を超えて先進諸国に並んでいます(図1)。15～24歳の非正規雇用率は、1990年には女性20.9%・男性20.0%だったのが、2001年には女性44.9%・男性42.1%になっています。

「フリーター」(厚生労働省定義、15～34歳の学生と既婚女性を除くパート・アルバイトおよび失業者)は、90年代初頭には約100万人でしたが、ピークとなった2003年では217万人。また、日本には、在学中に次の就職先が決まる新規学卒就職という珍奇な慣行がありますが、この新規学卒就職者の比率は、80年代までは安定した水準を保っていたのが、90年代から2000年代前半にかけて低下していきま(図2)。学校を出ても、就職があるとは限らない。「決められたレールの上を歩いていけば安心」というのではなく、正社員のパイが少なくなるなかで、誰が漏れ落ちてもおかしくない、そういう全体的に不安定な、見通しの悪い社会になりました。

さらに、重要なのは、「誰でも漏れ落ちる危険性がある」ということに加えて、「特定の背景を持つ人がとくに漏れ落ちやすい」という事態になっていることです。具体的には、学歴の低い人、出身家庭が裕福でなかった人、女性などです。

新規学卒就職市場でとくに変動が大きかったのは高卒層で、90年代を通じて高卒求人倍率は6分の1以下に減っています。求人倍率を学歴別にみると、90年代初頭には、中卒・高卒・大卒の順で高かったのが、2000年前後では逆転しています(図3)。そうすると、大学に進学しようと思う人は増える。短大・大学進学率は、70年代初頭から90年代初頭にかけて約20年のあいだ30%台を保持してきたのが、それからは上昇し

図1 15歳～24歳層の完全失業率の推移

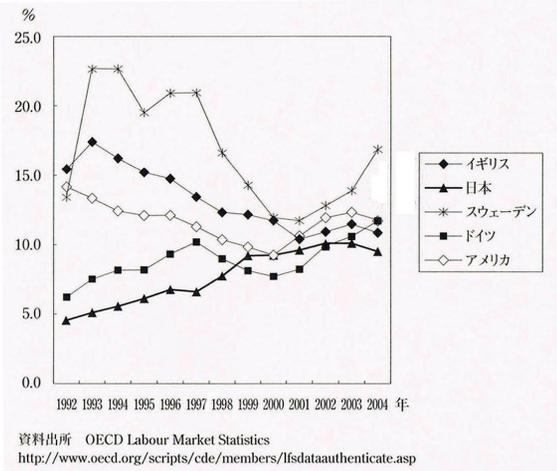


図2 新規学卒就職率(1980年代以降)

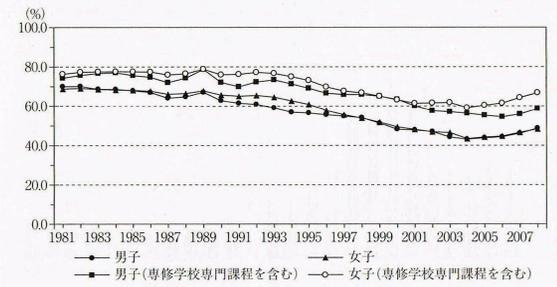
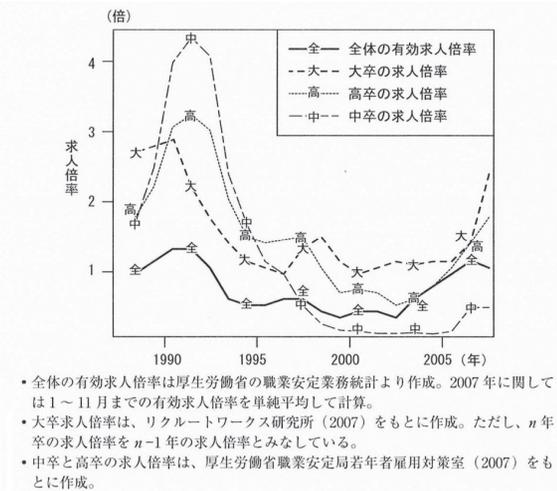


図3 学歴別求人倍率の推移



て、2004年以降は50%台に乗っています(浪人含む)。一方で、18歳人口は団塊ジュニアの通過を境に減少し、「厳しい受験競争」のようなものが一部の例外を除いて消滅していく。日本の大学生は7～8割が私立大学生ですが、2000年代

図1 15歳～24歳層の完全失業率の推移 (小杉礼子・堀有喜衣(編)2006『キャリア教育と就業支援：フリーター・ニート対策の国際比較』200p)  
図2 新規学卒就職率(1980年代以降) (乾彰夫2010『<学校から仕事へ>の変容と若者たち：個人化・アイデンティティ・コミュニティ』45p)  
図3 「学歴別求人倍率の推移」 (太郎丸博『若者非正規雇用の社会学：階層・ジェンダー・グローバル化』133p)

後半では私立大学全体での4～5割が定員割れを起こしています。大学としては、できるだけ学生さんに来てほしいから、選別している余裕はない。入試も多様化して、AOや各種推薦入試などペーパーテストなしで大学に入ることができるようになった。また、日本では大学の学費は諸外国に比べても高額で、しかも奨学金や公的ローンを利用している学生はとても少ない。結果として、学費の負担もとはおもに親です。そんな状況で競争が緩和されたら、どうなるかってことです。「受験競争が楽になってよかった」ということではなくて、家庭が学費を負担できるかどうか「大学に行ける人／行けない人」を決めていくような状況が出現してきます。

2000年前後ごろ、教育社会学は、そういう問題を見始めたところでした。それまで、教育を語るときに出身家庭の経済状態なんてものを持ち出すのはタブーで、「どの子どもも同じように伸びていく可能性がある、誰でもがんばればできるようになる」という「理想」のもとに、語られにくくなっていったようなところがあったんですけど、そのこのところ、つまり教育と階層の問題に、教育社会学の研究者たちは斬り込んでいました。家庭の経済状況や親の学歴や文化階層が、子どもの学習時間や学力に影響してくるというデータが出されていきました。私はこれを、目からうろこが落ちるような思いで読みました。

それと同時に、違和感も持ちました。教育と階層の問題は、「全体を見たときにこういう傾向がある」というかたちで示されます。ひとりひとりのリアリティはどうしても置き去りにされがち。そして結論は、「(家庭の格差を顕在化させないために) 公教育をしっかりとやろう」ということになる。不登校経験を持つ立場としては、それは気持ち悪いんです。「いや、でも大学に行くだけが生きる道じゃないし」「学校に行かなくても安心して生きられる社会を目指したいよな」とやっぱり思う。

そこで、教育社会学の知見にあるものとなないもの、運動の知見にあるものとなないもの、それらを組み合わせて、新しい思想をつくれなにかと思ったんです。当事者の視点に立脚しながら、階層やキャリアの問題にどう斬り込めるか。それが、

当時の私が考えていたことです。『不登校は終わらない』出版後、「アンチ不登校運動ではないか」という批判もいただきましたが、私にとっては心外なことでした。かつて80年代の不登校運動が目指していたような普遍性を継承しながら、新しい時代状況のなかでも通じるように更新したいと思っていたんですね。そういう意味で、私自身はとても80年代的だという自覚があります。

90年代以降、それ以前よりは「個性尊重」「選択の自由」が認められるようになった。それは、運動の成果という面もあると思います。でも、時代の要請と合致したから成功したとも言える。先ほど見たように「学校から職業への移行」システムが揺らいでいくと、「いい学校に入っていい会社へ入れば幸せ」という価値観も揺らいでいくわけです。すると、大人たちは「こうすればいい」とは言えなくなって、「何がいいかは人それぞれだから、自分なりの良さを見つけましょう」としか言えなくなる。「個性尊重」「選択の自由」というのは、そういう話でもあるわけです。

たとえば、高校の進路指導の先生の語りを見ると、80年代までは「生徒の自己決定を尊重するのは建前だけど、企業で採ってくれる子を推薦しなきゃいけないから、生徒の希望を誘導して調整してます」というようなものがたくさんある。「生徒の自主性を尊重」とか言いながら、裏で教師が糸を引いているわけですね。それでうまくいっていたのは、なんだかんだ言って、先生に任せておけばいい企業に就職できて安泰だ、という前提があったからです。でも、90年代以降その前提は崩れてしまった。先生は何もしてあげられなくなってしまった。そうすると、「受かるか落ちるか分からないなら、本人の希望通りにやってみたほうが、ダメだったときに納得できるだろう」ということになって、「自分の好きな道を、自由に見つけなさい」となる。もうそう言うしかないんですね。

「ひとつの良さ」の解体と、「それぞれの良さ」の尊重は表裏一体です。画一性と平等が崩れて、多様性と不平等が生じてくる。「個性尊重」「選択の自由」にはその両面があります。そこをキチンと見た上で言葉をつむいでいく必要がある。

## 不登校運動と新自由主義

山下：そういう意味では、不登校運動の言説と新自由主義は親和性が高い面もあるわけですね。それは、よくわかります。ただ、貴戸さんは「選択」言説を否定しているわけではないですよ。『不登校は終わらない』において、貴戸さんは「不登校を選んだ」と言っている人は誰なのか、腑分けしたわけですが、それによると、かつての不登校経験者で「不登校を選んだ」と言っている人は、不登校後、NPOやフリースクールなどに関わっている人のみだった。その後、学歴のないまま不安定雇用で生きている人や就労していない人は「選んだ」とは言えないし、その後、学歴を得て就職して生きている人も、触れたくない過去みたいになってたりした。「選んだ」と言える人はかぎられている。ただ、貴戸さんは、「選んだ」と言っている人、その「終わらない不登校」に、最終的に可能性を見出していますでしょう。

貴戸：そうなんです。そこ、伝わらなかったですけどね……。実際に不登校を選んだかどうかなんて、誰にも分かりません。重要なのは、その後の人生のなかで「自分の経験した不登校は選ぶに値するいいものだった」と思えるということ。だから、不登校経験に肯定的な意味を見出すことができるような共同性のなかで生き続けている人たちの語りに、希望を見出す書き方をしました。居場所のスタッフになった人、運動体の事務局で働いている人、フリースクールのなかで活動し続けている人という、それぞれ、階層論の立場から見たらマイナスに見えてしまうかもしれない存在こそが、実は一番可能性に満ちた存在なんだ、という結論です。そのあたりは、本当に、誰にも伝わらなかったような。

山下：そこまで議論が届かなかったのでしょうかね。当時は、選択の負の側面というところまで時代認識が追いついてなかったんだと思います。ようやく、ひとつでくくられることが緩くなってきた。一枚岩の学校、不登校することが許されないような学校から、ようやく少し解放されつつある。そ

れを運動の成果とのみ捉えてきた面があって、階層化の問題や選択の負の側面は、認識されてなかったと思います。だから、貴戸さんの指摘が反動として捉えられた面があった。あるいは利敵行為というような捉えられ方をした。

貴戸：階層化、「選択」への懐疑という視点は、すでに実証データも出ていて当時の教育社会学分野の人にとっては常識で、私のオリジナルでも何でもなかったんですけど、その事実の指摘自体が受け入れられなかったところがありました。この本を書くにあたって、不登校経験者17人にインタビューしているんですが、そのうち半分ほどが東京シューレとつながりのある方たちだったんですね。そういう意味で、不登校運動の内部言説を流用しながら、運動体の主張とはちがうことを言ったということで、“背中から撃たれた”と捉えられたこともあったと思います。

山下：そのあたりは措いておきましょう。この対談では、手続き的な問題（インタビュー方法など）や貴戸さんの立場の問題（当事者なのか研究者なのか）は措いて、問題提起の部分のみに焦点を当てたいんですね。なぜかと言えば、そのへんの感情論に終始してしまって、肝心の問題提起に議論が届かなかったことが問題だったと思うからです。

## 不登校によるマイナスとは？

山下：さて、もうひとつ。貴戸さんは、次のように書いておられました。

「病気ではない」「不利にならない」として不登校を「肯定」してきた〈居場所〉関係者にとって、「治療が必要な場合もある」「将来的なリスクがある」という〈医者〉や〈社会学者〉の主張は不登校の「否定」にほかならず、結果的に「明るい不登校」の「底辺」に存在する「明るくない不登校」には、正面から注意が向けられることがなかったのだ。

そこでは、不登校を「肯定」するためには「不登校によるマイナス」を認めてはならず、

「不登校によるマイナス」を認めるならば「治療」や「登校促進」といった不登校の「否定」に至らざるをえない、という極めて不自由な二者択一的状況が生まれている。

ここには〈当事者〉の視点が不在である。〈当事者〉とは、「不登校によるマイナス」をわが身にこうむりながら不登校を自分の経験として肯定する必要に迫られるひとつの立場であり、既存の物語のなかではみずからにとっての不登校を語りえない。

この指摘はたいへん重要だったと思いますし、「明るい不登校」を語ることが当事者を抑圧してきた面があることは確かだと思います。だけど、不登校の当事者運動のなかで、「不登校によるマイナス」に注意が向けられてこなかったとは、私は思わないんですね。たとえば居場所関係者の仕事は、子どものしんどさに付き合う仕事です。むしろ、そういうことに膨大な時間と労力を割いている。だから“そんなこと言われる筋合いはない”と思ったのではないのでしょうか（少なくとも、私はそう思いました）。

それから、マイナスと言っても、ここで指摘されているのは階層問題や就労問題ですよ。それは不登校というより低学歴の問題です。外形的なというか、そういうマイナスと、不登校にまつわって、精神的に苦しかったり、自己否定感を抱かせられたり、そういうマイナスとは、腑分けする必要もあったのではないか。

東京シューレは「事実に基づいてない」と批判したわけですが、それに対する貴戸さんの応答は、実際にシューレが何を言っていたかではなく、言説空間のなかでどう位置づけられるかを問おうとしたものだ、ということでした。これは、応答としても不十分だったように思います。

貴戸：「運動体研究ではなくて、不登校言説研究です」という応答ですね。あの本には、たくさん限界や至らなさがありました。

いま山下さんがおっしゃったように、マイナスと言っても社会経済的なマイナスと、アイデンティティ的な悩み苦しみがあるということは、そ

の通りですね。私は、社会経済的なマイナスについては、マイナスだとはっきり言う必要があると思いますが、アイデンティティ的な苦しみについては、マイナスだと一概には言えないですね。ある時点、ある存在においてマイナスであったことが、別の時点、文脈ではそれもまたプラスだったと意味づけられることもある。そのあたりを明確に腑分けできていなかったのは確かですね。

それからもうひとつ、書いたあとで気づいたあの本の大きな欠陥は、実践レベルと言説レベルはちがう、ということに配慮していないことです。

山下：それはあるんですね。世間に向かって、あるいは本にして語るというときに、語れることはかぎられていて、マイナスに向き合っている部分は語りがたい。それは、居場所関係者、現場にいる人にとっては自明のことだろうと思います。たとえば、私の経験としても、いちばん最初は学生新聞の取材でシューレに行ったんですが、そこで見たことや本で知ったこと、あるいは学生ゼミという会に参加していたんですが、そういうところで見えることと、実際、日常的にボランティアやスタッフとして関わってからは、ずいぶんギャップがありました。当たり前のことですが、外に向かって語られていることは、ごく表面でしかなかった。そこから見えることは限定的だったわけですね。

貴戸：そうだと思います。運動として戦略的にも語れないし、そもそも言葉にならないこともある。2005年に、『現代のエスプリ』に収録された小さな論文で、私は居場所を主宰している人にインタビューして、居場所での実践をスタッフがどのように言葉にするのかを見たんですね。そこで明らかにしたつもりなのは、現場での実践は、苦しみやつらさや社会経済的な不利益を見越した実践が行なわれている、でもそれを言い表す言葉自体は80年代から変わってない、ということです。行なわれている豊かな実践をきちんと表現する言葉を見つけることが課題ではないかと書きました。そうしたら、ある方がブログでとりあげてくださって、そんなことは研究者ではなく、現場

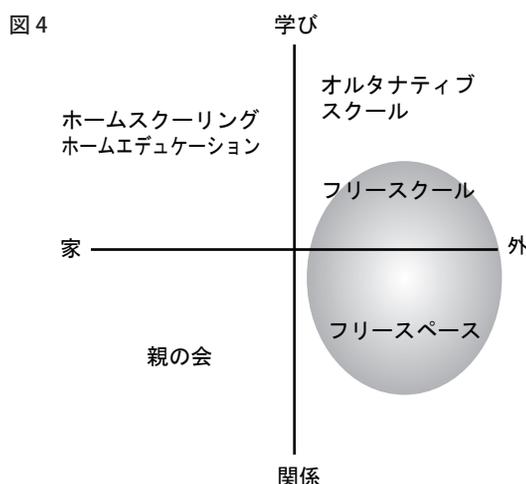
で私たちがやっていく課題だとの批判をいただきました。実践と言語レベルの混同は、たしかにありました。それは、運動体から批判をいただくなかで、自覚していったことでもあります。

でも、ひとつ当時の私を弁護するなら、あの本のなかで私は徹底して「不登校運動の空気」のなかで不登校をして、大人になってこの90年代・2000年代以降の社会に出ていく・いかざるを得ない当事者」の視点から書いています。親や支援者として子どものしんどさに向き合うということと、しんどさをわが身に引き受けるということは、やっぱりちがいます。子ども・若者本人が「不登校・フリースクールを選ぶ」と語るこの意味も、親・支援者にとって、当事者にとってではちがう。当事者には「その後」があるんです。「選んだ」と語った自分を抱えながら「その後」を生きていくんです。そこを書きたかった。

山下：言説の部分が抑圧性を持っていたのは確かだと思います。明るい不登校が前面に出ていて、それは現場の実感や当事者の実感ともズレているものとしてあって、ときには語っている本人自身にも抑圧性があった。それはハッキリ言っていることだと思います。もちろん、そこには時代の力学があって、いまだから言えることもあるとは思いますが。当時の感覚は忘れてしまっているところもありますからね。そうとうの圧力のなかで語られてきたという面はあるにせよ、抑圧の側面を持っていたことは指摘していい。

### 不登校を選んだ？

山下：図4は拙著『迷子の時代を生き抜くために』で図示したのですが、不登校運動といっても、いろいろちがいがあるので、居場所関係者というくりは、ちょっと乱暴だったと思うんですね。たとえば、親の会で子どもが家にいるのを肯定しようという場合と、ホームスクーリングを実践しているのだから認めようというのでは、何を軸としているかが、ちがうわけですね。同じことはフリースペースや居場所という場合と、フリー



スクールやオルタナティブスクールという場合のちがいにもある。関係を軸として考えるのか、学びを軸として考えるのか。

もちろん、これは理念型であって、現実には混ざり合っているものです。とくに東京シューレは、これらを一環したものとして運動を展開してきたので、東京シューレの言説ではいっしょのようと思われるかもしれませんが、しかし、たとえば親の会のなかには、「居場所やフリースクールに子どもをあずけると、かえって親が自分を問わなくなるからダメだ」という人もいるわけです。

選択という問題に戻ると、オルタナティブスクールやホームスクーリングというように、教育を軸にした場合、学びにおける選択だということで、選択が強調されるんだと思います。私の認識では、いろいろ矛盾もはらみ、さまざまな観点のあった不登校運動の言説が、そっちに流れていってるんだと思うんですね。「不登校を選んだ」という言説は、実際にはフリースクールやホームスクーリングを選んだと言ってきたことが多いのではないですか？ 不登校そのものを選択したとは、それほど言われてこなかったのではないのでしょうか。

貴戸：うーん。その二つが重なっていたのが、80年代までの状況だったと思うんです。80年代、日本の学校は世界的にも成功事例と見なされていたんですね。国際学力テストの成績もダントツ1位、中退率も低い、労働者階級と中産階級と分か

れていなくて、みんなが学校にコミットする。高校ランクも細かい偏差値で分かれていて、その細かい仕切で競争があって、底辺校でも勉強する。たとえば工業高校や商業高校でも、学校経由で就職するので、成績のいい子から、トヨタや東芝といった大手企業に就職が決まっていく。学歴の低い子どもが、学校からドロップアウトせずに、学校に組み込まれ続けるのが日本の学校の大きな特徴だったんです。それが、たいへん平等でばらつきが少なくてよいと、高い評価を得ていた。

しかし、これはある意味ではすごく気持ちの悪いことで、なぜなら、学校以外に道がないんですね。学校から企業に入るというルートは広いけれども、そこから逸れる人には道がない。逸れる人は少数はだから、学校という王道に戻すということしか対策が立てられない。

第二次大戦後、日本の学校の平等化がどのように達成されていったかを財政的に見た歴史的研究がありますが(荻谷剛彦 2009『教育と平等』)、平等が学級という「面」を単位とした画一化・標準化と重ねあわせられながら成立してきたことがよくわかります。インフラ不足や財政難、大きな都市・地方格差など困難な時代的条件のもとで、義務教育の平等を達成しようとしたらそうだった。そこでは、「同じ設備で、同じ教科書で、同じような先生から教育を受けている」ことが平等だと見なされ、「ひとりひとりに合った多様な教育」が平等だという発想がありません。オルタナティブがないというより、「オルタナティブを構想する」という発想自体がない。そういう状況のもとで、不登校を選ぶも、フリースクールを選ぶも、重なっていたのではないのでしょうか。ところが、90年代以降、画一＝平等が崩れてくると、「選択」の意味も変わってくる。

山下:不登校にかぎらず、“みんないっしょで安心”という時代空気がなくなったわけですね。それは時代の変化であって、不登校運動の成果というよりも、同時代に起きている現象のひとつだ、と。

貴戸:もちろん、ひとつひとつの権利獲得は運動の成果が大きいのと思いますが、大きな時代の変化

を見ると、そういうことが言えると思います。不登校だけではないんです。フェミニズムでも障害者運動でも、70年代～80年代の20年くらいに成り立っていた図式が、90年代以降、大きく変化してきたというのはあると思います。

山下:女性も、ひとくくりにはできないですね。かつては階層によって、ひとくくりにはできなかったのが、いまは多様化していて、ひとくくりにはできない。若者というのも同じですね。古市憲寿(社会学者)が指摘してるように、ある時代につくられたカテゴリーでしかない。それが、時代の変化のなかで解体されていく、カテゴリーとして成立しなくなってくる。不登校もそうですよね。ある時代のなかでカテゴライズされたもの。それが当然のことながら、解体されていく。

貴戸:「不登校」というカテゴリーで問題を捉えることが、時代的に難しくなっている。……その先は、どうお考えですか？

山下:むう。ちょっと、そこに行く前に、もう少し片づけておきたい問題があるので、ちょっといいですか？

貴戸:はい、どうぞ。

### グレーゾーンの問題

山下:不登校は、病気や神経症とされたり、「病気じゃない」という異議申し立てがあったり、ジグザグを描いてきたわけですね。90年代以降は、かたちを変えて、ひきこもりが治療対象とされ(斎藤環)、発達障害が脳機能障害としてクローズアップされてきた。

私は、学校にしても、労働環境にしても、やっていけないという人たちを問題にするより、やっていけない学校や労働環境を問い直さなければいけないと思ってます。

しかし、現在の状況を前提とした場合(いま現在、その状況を生きているわけですから)、不登校やひきこもりというのは、グレーゾーンの問題と言ってよいのではないかと思います。ハッキリ

と病気や障害とは言えない、理由もハッキリしない、しかし、やっていけない。それゆえに、親にとっても、教師にとっても、医者にとっても、やっかいな問題で、だからこそ、問い直しの契機にもなっていた。簡単に腑分けできないわけですね。

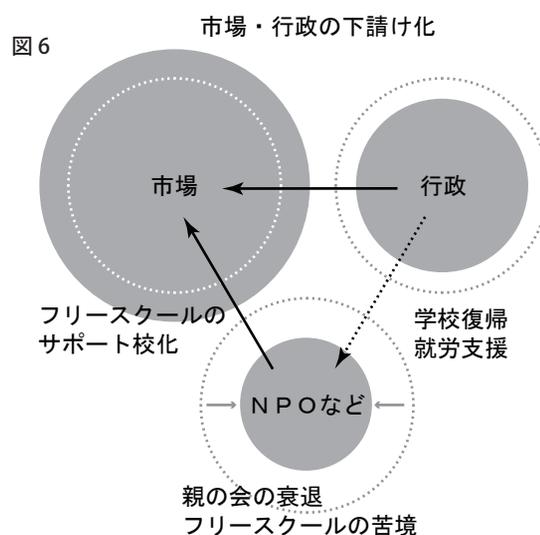
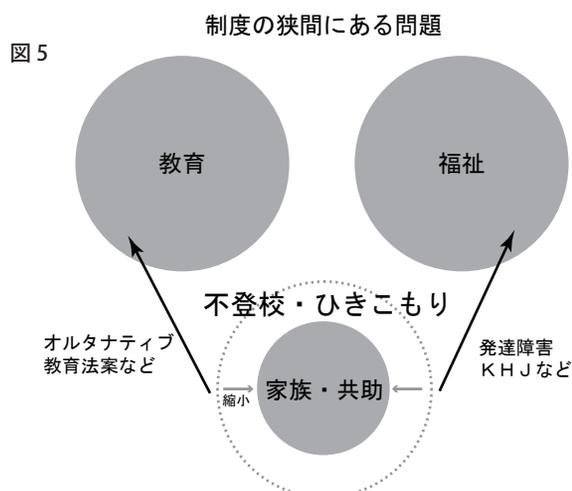
やっていけない人を、障害や病気としたほうが、メインストリームを走る人には了解が得られやすい。あるいは当事者にとっても、そういうラベリングを引き受ければ、障害年金がもらえるとか、免罪されるというか、そういう面がある。

居場所の位置づけを考えた場合も、ラベリングを引き受けて、福祉の枠組であれば、制度に乗せることができる。逆に、稼働能力があるんだと証明しようとする、教育制度、学校として認めてほしいということになる（図5）。

そもそも、稼働能力の有無で人を選別すること自体がまちがっていると思うんですが、グレーゾーンの問題を誰が支えてきたのかといえば、家族ですよ。それを家族だけで抱え込むのではなく、共助として広げたものとして、居場所が生み出されきた。そういう共助の領域がある程度あれば、制度に頼らなくてもやっていけるとも言えます。しかし、フリースクールなども、厳しい経済状況のなか、自律的な運営が難しくなっている。そうなってくると、制度に乗せてなんとか運営を維持したいとなる。そこで、福祉か教育かということになってくるわけですが、私は、制度にのらないで支え合う領域がないと、苦しいのではないかと思ってるんですね。だから、なんとか踏んばろうとしている。

### NPOが行政・市場の下請け化

山下：次に、行政・市場・NPOの3つのセクターの関係を考えると（図6）、新自由主義のなかで行政が外部委託を増やし、一方でNPOの自律的な運営が厳しくなっているなかで、市場ばかりが広がっているように思います。たとえば冒頭でもお話したように、構造改革特区でできた学校63校のうち、NPO法人で設立されているところはゼロです。オルタナティブスクールと言え、そんな学校は、私の知るかぎり3校のみで（いずれも学校法人として設立。そのうち1校は経



営難で2011年度で閉校)、株式会社立の学校など、市場ばかりが拡大しているわけです。あるいは行政とNPOとの連携といっても、ひきこもり支援が就労支援となったように、NPO活動が行政の下請け化しているんですね。しかも、安上がりな下請け。さらには、NPOが市場の下請け化している面がある。これも冒頭にお話したように、近年、サポート校化するフリースクールが増えてきています（フォロにも通信制高校が営業に来られましたが、お断りしました）。制度が柔軟化したことで、市場的なものは広がっていても、NPOはかえって弱体化しているように思います。

アソシエーション的なもの、共助的なものが弱体化している。一方で家族も解体してきているなかで、グレーゾーンの問題を誰が支えるのか。支え手を失って、問題が宙づりになっていて、孤立

化したり、シビアな状況が生み出されているのではないかと。私は、そういう危機認識を持っています。

## ニーズの共同化

貴戸：その問題意識は共有しています。「公」「私」「共」の各セクターのなかで、市場という「私」セクターが拡大している。それは同時に、人びとの欲求が、「オルタナティブな共同性がほしい」というものではなく「多様なサービスがほしい」というものへと、水路づけられているということでもありますね。たとえば、先日、朝日新聞に学童保育の「多様化」という記事が出ていました。ある民間企業が経営する「新しいタイプの学童保育」の話で、高額な保育料で子どもをあずかりながら、ネイティブ講師が英語で話しかけたりしているんですね。週何日利用するかによって料金も段階的に設定されていて、「働いているから平日の送り迎えはできないけど、子どもには習いごとをさせたい」という親のニーズを汲んで、利用が伸びているという話でした。面倒な保護者会やバザーなどもいっさいなくして、親の負担を減らしているんだそうです。

それを「ニーズの多様化」と呼ぶのは、トリッキーだなと思いました。むしろ「ニーズの個人化」と言うべきだと思います。多様なニーズが認められることは、いいことです。でも、そのことと、問題解決の仕方が「サービスを買う」ことになるのとは別。学童保育には、働く親たちが集まって保護者会を組織して、放課後の子どもの生活を共同で見守っていこうという発想があったはずですが、「新しい学童保育」にはそれがありません。「ニーズの共同化」の方向性が失われていくとすれば、それは問題だと思います。

学校外の子どもの居場所も、似たところがあるのではないのでしょうか。そもそもは、「子どもが他の子どもたちとともに学び育つ場を、学校の外につくっていこう」という親や支援者たちの共同性のなかから立ち上がってきたものですね。それが、「多様な選択肢のなかから子どもに受けさせたい教育を選ぶ」ということになると、「ニーズの個人化」が起こっていく。そんなふうに考える

と、山下さんが目指しておられるのは、「ニーズの多様化」を尊重しながら、「個人化」を避け、「ニーズの共同化」にいかにつなげていけるか、ということではないでしょうか。

山下：「ニーズの個人化」というのは、別の言葉で言えば「ニーズの商品化」と言えるんじゃないでしょうか。市場価値に沿ったものだけがニーズとしてすくわれていて、市場価値にならないようなニーズはどこにも受けとめられなくなっている。市場が広がって、家族も解体しているし、家族だけではなく、共助的なものは解体している。

日本では、少し以前まで、画一的、面的な平等性が、古い共同体を丸飲みにしたようなかたちで、利益社会とべたっといっしょくたになったものとしてあったんだと思います。そのなかには、あたたかかったり心地よかったりする反面、そこからズレた人にとっては非常にシビアだった。不登校運動では、「学校は画一的で子どもたちの多様な学びのニーズに答えてない」という語りが多くされてきましたが、不登校が問うているのは、画一＝平等の抑圧だけではなくて、そういうものが解体されて、市場化され、自分の商品価値を高めて売っていかないと関係さえ持てない社会へのしんどさでもあったと思います。つまり、市場ばかりが広がって、人が支え合っている「社会」がないことへの問題提起という面があるのではないかと。

## 制度化は必要

貴戸：私は、市場化路線は疑わしいと思っていますが、制度化は必要だと考えているんですね。制度化が運営基盤を安定させるとして、支援者が安定すれば、当事者も安定しやすいだろうということと言える。図5と図6では、不登校・ひきこもりという「あいまいな」領域が「教育」「福祉」などの制度的なカテゴリーに組み込まれて縮小していき、どんなカテゴリーにも回収できないグレーゾーンが「残部」として析出されること(図5)と、制度が揺らいで市場化路線が強まる中で、NPOのような「共助」的なあり方が難しくなっていること(図6)が、重ねられて提示されてい

る印象があります。でも、この二つは位相が違いますよね。

山下：もちろん、ちがいます。

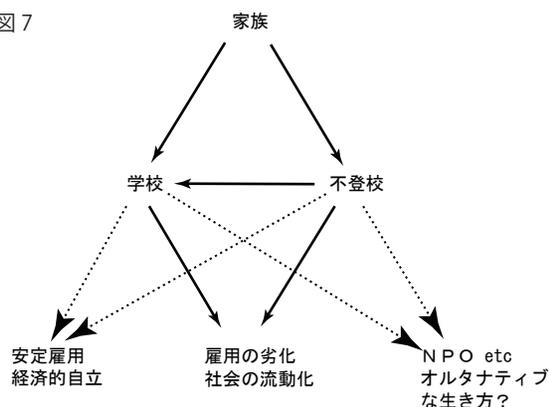
貴戸：山下さんのなかで、市場化と制度化がゴツチャになっているところがあるような気がします。市場化では持ちこたえることができない。市場にはなじまない。そういう領域こそ、制度としてすくっていくことが大事だと思います。行政の役割は、市場にはなじまないけれども必要な場の、運営基盤を保障することでしょう。もちろん制度化する以上は、より多くの人に通じやすい「福祉」とか「教育」とかのカテゴリーを引き受ける必要が生じてくることは確かです。ただ、引き受ける側のスタンスとしては、建前だけ受けいれるとか、受けいれることでそのカテゴリー自体の意味を広げていくとか、そこは幅があっていいんじゃないかと思うんですが。

山下：それはそう思ってます。そんなに潔癖に考えているわけではない。私は、個人の生き方に即して考えたときも、“部分的に魂を売る”ことをひとつの戦略として推奨しているんで、フリースクールや居場所でも、部分的に魂を売って、制度でも市場でも利用したらいいとは思ってます。ただ、よっぽど自覚してないと、たんに下請け化して、利用されて、吸い尽くされておしまいでしょ。そのあたり、無自覚に流されているのではないかという危機感があるんですね。

### 終わらない不登校の可能性は

山下：先ほど貴戸さんから、子どもが学校を通して職業へ移行していく流れが揺らいでいるという話がありましたが、それを私なりに図示したものが図7です。ある時代、自営業などが衰退してサラリーマン化が進んだ時代においては、学校から会社へという線が自明だったわけです。ところが、いまや安定雇用は点線になって、劣化した雇用、流動化した社会への不安が拡大している。不登校の場合、低学歴だと必然的に劣化した雇用になりますが、学校にもどっても、結局は不安定雇

図7



用だという不安がある。

貴戸さんは『不登校は終わらない』において、フリースクール関係のNPOなどで雇用が生み出されていることに「終わらない不登校」の可能性を見出していたわけですが、いま、そこもだいぶ厳しいんですね。『Fonte』も休刊の危機ですし……。2000年代前半では、まだ、実態としてはこれからでも、当為として、理想として、市場価値だけではなく、人がやطيعける社会を創造していけるという希望があったんだと思います。そういう希望がないと、フリースクールだとか言っても、結局は、“こっちのほうが商品価値の高い労働力になりますよ”というような話にしかならないわけです。

いまは、貧困が前景化してくるなかで、不登校とかひきこもりなんて「甘っちょろい悩み」と見なされがちです。しかし、不登校やひきこもりというのは、市場価値一辺倒の社会に対するノーサインだと思うんですね。いま、対抗言説が成り立ちにくくなって、希望が見えにくくなって、問題の所在も見えないまま、息苦しさばかり増しているような感じになっているように思います。

不登校が、問いとして成り立ちにくくなってきた。それは、先ほどの不登校というカテゴリーの解体ともつながっている。

貴戸：本当にそうですね。市場的価値で見れば、稼働力の割にコストが高くつくと思なされ、忌避されるような考え方や体質を持つ人が、ありのまま、誇りを持って安心して生きていける社会をどう展望するか。その課題を見失ってはならない

と思います。

ただ、そういう発想はもともとフリースクールやオルタナティブ教育にあったものではなく、日本的なバージョンの深みでしょうね。1920年代のヨーロッパの新教育運動のなかで出てきたフリースクールも、基本的には成人するまでで、その後は既存のオーソドックスな社会に出ていく。そうすると、サマーヒルの卒業生は社会で活躍しているとか……。

山下：そういう語り口になっちゃう。サドベリーバレースクール（アメリカ）のダニエル・グリーンバーグが、既存の学校は産業社会モデルのために時代遅れで、オルタナティブスクールのほうが、ポスト産業社会＝情報化社会に適しているということを言っていました。それを支持する人も多かった。一面ではそうかもしれないけど、でも、そうやってしまうと、不登校というかたちで出された問いとはズレと思うんですね。市場価値しか尺度のなくなった社会で、親でさえも自分のことを市場価値の尺度でみている、それ以外の価値尺度で関係が結べない、そのしんどさ、そのことへのノーサイン。自覚しないまでも身体から反応してしまってるわけですよ。

### 賃労働の質的多様性

貴戸：「市場価値しかないことの危険性」という問題意識はよくわかりますし、共有しています。そのうえであえて言えば、市場に出て賃労働をするということのなかにも、かなり質的な多様性があると思うんですね。

山下：それはそうですね。

貴戸：一定の条件をそなえたディーセントワーク（働きがいのある人間らしい仕事）をすることで、「私は社会に必要とされている」「意味ある存在だ」と感じることができます。別に「私にしかできない個性的な仕事」でなくてもいいわけです。一定程度、自分の裁量を持って、ある程度の期間にわたって続けられて、自分と子どもが食べられるだけの収入を得ることができて、ステップアップし

ていけるような、最低限の条件をそなえた仕事に就ける可能性を持っていること。これは大事なことだと思うんですね。

問題は、そうではない仕事がとても増えていることです。たとえば、いわゆるフリーターがやる仕事は、内容がかたよっています。事務ならひたすらデータ入力とか、工場労働も「機械の一部になる」ようなベルトコンベアワークが中心。サービス職も、医者とか教師のような有資格の対人サービス業ではなく、仮設ブースでの呼び込みとか、ウエイター・ウエイトレスとか、「いらっしやいませ」と言い続けるような仕事です。いつクビを切られるかわからない、毎回、同じことのくりかえしでステップアップの可能性もない、年収百数十万で所帯を持つどころか親元から独立することもできない。発言権ももちろんない。そういう仕事を、本人が望んだわけではなく、ずっと渡り歩かざるを得ない状況は、問題だと思います。ただ、それは賃金労働が全部ダメということとはちがいます。

山下：その通りだと思います。あんまり乱暴に、市場価値に組み込まれたら、すべておしまいということではありません。しかし、市場価値しかないというしんどさは、階層の上下を問わない面もある。社会学者の見田宗介が「疎外の二重水準」という言い方で、「貨幣へ疎外されたからこそ、貨幣からの疎外が問題になる」と言っていますね。お金を稼がないと生きていけない仕組みに組み込まれてしまったからこそ、お金がなくなることが問題になる。そういう視点はつねに持っておきたいですね。学校についても、学校へと疎外されたからこそ、学校からの疎外が問題になるわけです。

それと、質のいい職はパイが縮小しているわけで、大多数がそこをめがけて殺到して、大多数が敗れていっているわけですよ。希望に向かって走っているわけではない。不安や恐怖で、敗れる人が多数なことをわかったうえで、殺到しているわけです。だから、希望は少しでも安定していること、ぐらいしかない……。

貴戸：正社員になれば安心かということ、そうでも

ありませんしね。正社員のパイが縮小されたことで、正社員も過重労働になって、過労死したり、うつ病になったりしてます。

山下：そうですね。

### ラディカルさの手前で踏みとどまる

貴戸：おっしゃるようなラディカルな視点はとても大切だと思います。「学校に行くのは当たり前」「働かざる者食うべからず」は当たり前」と多くの人が信じていて、だからこそ学校に行かない・行けない、働かない・働けないことが苦しいというのがある。ただ、ひとりの生きづらい人がどんなときに苦しみが少なくなっているかと具体的に考えると、けっこう単純なもので、恋人ができたとか、書いたものが人に読まれたとか、バイト先で友だちができたとか、そういうことだったりするんじゃないでしょうか。「学校に行くべき・働くべき」という価値を根本から問い直すようなラディカルさと並行して、そのちょっと手前で踏みとどまる道も、残しておいていいと思うんです。

「学校に組み込まれるか、学校そのものを根本から問い直すか」という二者択一の構図は不自由です。不登校運動にかぎらず、日本の市民運動には、「既存の前提を受け入れるか、前提そのものをひっくり返すか」と問うことで、「前提は受け入れたうえで漸次マシンなものに改良する」というしたたかな視点が少ないですね。もしかしたらそれは80年代までの、のっぺりとした「平等＝画一」の裏面だったのかもかもしれません。

でも今や「平等＝画一」自体が揺らいでいて、「前提そのものをひっくり返す」ということも難しいわけです。ぶっとばずに手前で踏みとどまる道を、個別の文脈に合わせて探していく必要を感じます。そういう道と、ラディカルであり続けることを、二者択一にする必然性は、もうないんじゃないでしょうか。

具体的にいうと、フリースクールが通信制高校のサポート校になるという話も、私は賛成です。10代の人間にとって、高卒資格が取れることの意味は大きい。自分が過ぎしやすい場でそれができるなら、いいことだと思います。

### 魂を売るにしても

山下：でもね、フリースクールで資格が取れるわけじゃないですよ。あくまで通信制高校の卒業資格です。二重にお金もかかるわけですし、内部に線引きを入れてしまう面もあるでしょうし、実際問題、しんどいんじゃないでしょうか。直接、話を聞いてませんが、フリースクールがサポート校化した理由は、経営面が大きな理由じゃないかと推察します。だから、部分的に魂を売ってる、というならいいんですが、さも、いいことをやっているように語ることはないだろうと思いますね。そこを見据えないと、危ない。

私自身、「部分的に魂を売る」生き方を提唱しているんですが、いただく批判として、「だんだん売ってる部分が増えて、気づいたら疲弊して、売らない部分も残ってない」と言われることがあります。とくに30代、40代になると厳しい。アート系NPOの知人からも、似たような話を聞きます。気づけば、劣化した雇用のなかで、劣化した生活を営まざるを得なくなっている。ですから、フリースクールなんかも、よっぽど自覚的でないと、気づけば魂をぜんぶ売っていることになってしまう。でも、そこで踏んばろうと思ってる、なお、お金が入ってこないんですね。それで、そのしわ寄せを自分たち、スタッフに寄せてしまっている。そこが悩ましい問題です。正直なところ……。

貴戸：スタッフが食えないというのは、しんどいですよね。

山下：フォロでは、2009年度からフリースクールのスタッフ3名を全員週3日のパートタイムにしました。それまでの体制ではやっていけなくなってしまって、会費を思いっきり下げて（月額3万8000円から2万6000円）、スタッフもパートタイムにしたんですね。会費が高かったら来れないし、付加価値で客引きしたくない。悩んだあげく、そういう体制にしました。その判断が正しかったどうかはわかりませんが……。

## オルタナティブ教育法案

山下：2010年から、フリースクール全国ネットワークが「オルタナティブ教育法案」を策定しようという運動を起こしています。国会で議員連盟もできていて、法律化を目指しています。私は、これも批判しているんですね。教育制度が多様化しようということには賛成できるのですが、不登校の解決として言っていることが、鼻持ちならないんですね。たとえば、提案趣旨に次のようなことが書かれています。

フリースクール等で、不登校の子どもたちの多くは元気に成長し、自立への道を歩み、現在、社会人として学び、働き、結婚して親になっている人もかなりいます。この事実は、人が成長するのは、学校のみではないことも裏書きしています。

フリースクールに通えば、不登校でも「自立」「社会人」「結婚」できるから制度として認めろなんて、ずいぶん呆けたもんだと思います。それからもうひとつには、フリースクールの実態を考えたとき、いまあるフリースクールが学校になるとは思えないんですね。多くのフリースクールは、10名規模ぐらいです。しかも、小学生から高校年齢ぐらいまでの年齢層で。そういうものを学校として位置づけるのは、そうとうに無理がある。制度化することで、共助的な機能が失われてしまったら意味がない。

それから、仮に学校が選択できるようになっても、その先は変わらないわけですよね。劣化した雇用、流動化した社会のなかで、「社会人」としてやっていけるとは、どういうことでしょうか。フリースクールが学校制度として認められたところで、市場価値優位の社会のなかで、自分のアイデンティティが、そこにどれほど見いだせるか。選択してよかったものと言えるのかと言えば、はなはだ疑問です。

制度を部分的に利用しながら、共助的な部分をふくらましていけるような道筋がないかということとは、つねに悩んでいるところですが。

## ベーシックインカム

山下：発達障害でも、同じことが言えますよね。発達障害も、近年、問題になってきたのは「軽度発達障害」で、グレーゾーンの問題ですよ。それが障害として問題になってきたのは、コミュニケーション優位の社会のなかで、あぶりだされてきたからです。診断されなくても、同じような生きづらさを抱える人はたくさんいますし、自閉症そのものが、スペクトラムでハッキリ線引きできるものではない。そういう問題を、制度でどこまでカバーできるのか。

あるいは、発達障害者でフルタイムで働いている人が少ないという話も聞きます。正社員になるのは難しく、障害者雇用だと、重度障害者モデルで単純作業しかない。結果、バイトなど非正規雇用で働いている人がすごく多い。

膨らむ一方のグレーゾーンの問題を考えたとき、私が制度として望ましいだろうと思うのは、ベーシックインカムですね。ディーセントワークのパイは必然的に縮小していて、ただでさえ競争が激化しているわけですから、実際問題、大多数の人は、そういう職に就けないわけですよ。ですから、柔軟化した労働を逆手にとって、魂を売る時間は短くして、ほかのアソシエーション的なところに労力も時間もお金も使えるような制度、仕組みのほうが望ましいんじゃないか。それは、いま見えている制度のなかでは、ベーシックインカムだろうと思います。もちろん、ただでさえ福祉が希薄な日本社会で、いろいろ問題もあると思いますし、グレーゾーンの問題には適していても、ほかの側面から見たら、問題は多いのかもしれない。そのあたりは、まだ勉強不足なのですが、障害種別とか、稼働能力の有無ではなくて、生存権が保障されるという意味で、ベーシックインカムの可能性はあると思います。

貴戸：ベーシックインカムで、単独では食えなくても、何人か集まれば食えるかもしれないですね。

## アソシエーションへ

山下：図8は柄谷行人が『世界共和国へ』などで社会を交換様式で分類した図です。Aは互酬で、古い共同体ですね。おたがいさまの関係だけど、閉鎖的。Bは再分配で、国家。税金を強制的に徴収して、再分配する。Cは商品交換で市場。自由で開かれているけれども、ドライで流動的。それに対してDは、市場のように自由で開かれているが互酬関係の領域で、アソシエーション。これは実態としてあるというよりも、理念として重要な領域だと言ってます。ヨーロッパにおいては、教会がDの領域を担ってきた。古い共同体でも国家でも市場でもない領域。これを、国家（B）に対して言う場合はN G O（Non-Governmental Organization）になりますし、市場（C）に対して言う場合はN P O（Non-Profit Organization）になる。さらに、野宿問題に取り組む生田武志は、家族（A）に対してN F O（Non-Family Organization）と考えられないか、と言ってます。

いずれにしても、Dの領域を支えるのは寄付文化ですね。これが日本は弱い。身内であればお金を出すが、他人、よそ様のことは知らない。AとBはぬめっといっしょくたになっていて、学校もそうですよね。古い共同体を丸飲みにしてきた。だから、そこからはみ出すことは厳しかった。

図9は、柄谷の図をもとに、私が置き換えてみたものです。Aは核家族のみに縮減していて、それも解体しつつある。Bは学校で、就学義務が課せられているかわりに、学校に行けば平等に学べるわけです。Cは塾などでしょうね。お金を払うほど、学べることになっている。それに対して、Dが居場所やフリースクールだと思います。

Dの領域が弱ってしまうと、悪しき幻想としての古き良き共同体の復権みたいなお化けが出てくるでしょう。つい先日、大阪市が家庭教育支援条例というバカげた条例案を議会に提出しようとして、総スカンを食らって引っ込みましたが（「わが国の伝統的子育てで発達障害を予防する」などと言っていた）、ああいうものが出てきちゃうんですね。昭和30年代ブームみたいに、バーチャルに楽しんでいるぶんには勝手ですが、“ゲーム

図8

B 再分配 (略取と再分配)	A 互酬 (贈与と返礼)
C 商品交換 (貨幣と商品)	D X

図9

B 学校	A 家族
C 塾産業	D 居場所etc...

脳”ならぬ“ショーワ脳”のおっさんどもが、妄想と現実をゴッチャにして、権力づくで条例や法律を作って押しつけてこられては、たまったものじゃありません。むしろ、非実在昭和取締条例でもつくったらどうかと思いますね。

それはともかく、Dの領域が希望として見えていた時期が、少し前までは確実にあったと思うんですね。アデレード大学のワンさんが評価してくださったように、不登校運動には、そういう希望があった。ここに希望があれば、今まであったものをモデルにするのではなくて、領域を広げていける。Dが弱くなると、市場ばかりが広まる一方、妄想化したAがお化けみたいに復古してくる。だから、いろいろ現状は厳しくても、Dの領域に焦点を当てたいという気持ちは、すごくあるんですね。そのあたり、なかなか伝わりにくいのですが……。

貴戸：伝わっていくためには、Dで食っていけるモデルをどうつくれるかですよ。

山下：私なんぞは力不足で、食えないモデルばか

図8 交換様式の四分類（柄谷行人『世界共和国へ』22p）

図9 図8をもとに山下が作成

り示してますね……。寄付してくれる人がたくさんいればいいんですけどね。Aの贈与と互酬って重いでしょう。贈られたら返さないといけない。そこで、おたがいを縛り合ってきた。市場は決済がそこですんでるからサッパリしていて自由ですから、Aが縮小して、Cが拡大してきたのは、当然といえば当然なんだと思います。でも、市場だけでは人は生きていけない。日本はDの弱さを家族福祉、企業福祉でやってきたんだと思います。いまは、それが壊れて、バラバラ。苦しいわけですよ。ヒモつきとか、身内向けとかではない寄付文化があったらいいのになって思います。なかなか、難しい気がしますけど……。

それから、たとえば家事がアンペイドワークだと指摘されてきたように、市場にそぐわない領域は、無償で家族が担ってきた面がありますよね。それを社会化していこうという動きは、さまざまに起きていますが、やはり、価値としては低く見積もられている。市場ではない領域に価値を見出して、お金を出す文化が必要だと切に思いますね。

貴戸：欧米だと大金持ちが財団をつくって支援したり、教会のコミュニティが引き受けたりするんでしょうね。そういう意味で、ニーズの多様化がニーズの共同化に結びつく下地があるんだろうと思います。日本では、たしかに厳しいです。

山下：市場での価値がないと自分に価値がない、Cだけがすべてという苦しさ。Cでやっていけるかどうか、稼働能力の有無で人が選別されている。そういう構造のなかで、フリースクールが、Cでやっていける人を教育しているから「学校」だなんてことでは、まったくダメだと私は思ってます。不登校、ひきこもり、発達障害、ニートなどなど、レッテルは変遷していますが、指し示しているところは似ていますよね。Cだけではやっていけないというグレーゾーンがボリュームとしては膨らんでいるのに、それを支えるものは縮小している。私たちは、Cではやっていけないという側に立って、やっていける領域＝Dに向かって踏み抜いていくことが必要なんだと思います。もちろん、人がDだけに属して生きられるわけではない。そう

いうふうに思っちゃうと、かえって危ないと思います。先鋭化して、暴走してしまう。現実には、人はAにもBにもCにも属している。Dの領域に立とうとすることは、矛盾を抱えることでもあると思いますが、そういう矛盾こそ、私は大事だと思っています。イメージとしては、Dの領域は、スキマを見つけて、菌が繁殖していくみたいに、増殖していく感じですね。

矛盾だらけでも、細い道でも、Dに向かっていく希望がないかぎり、むかつきだけがたまって、自己否定感ばかり強まって、暴発するようなことも、あちこちで起きている。仮に「支援」というのなら、Dに向かっての支援が必要なんじゃないでしょうか。

貴戸：金じゃなくて、菌ね（笑）。なるほど。居場所やフリースクールを、何かのための手段にするのではなく、「孤立化しない」という、それ自体が目的であるようなものとして捉えるということですね。それはもう、「支援」という言葉で括める範囲を超えた実践だと思います。

### 稼働能力の有無で線引きするな

山下：話が少しそれますが、レッテルで思い出したのは、トイボックスというNPO法人が、大阪府と結託して「レイブル」という呼称を広めようとしてるんですね。「ニート」に代わる名称で、レイトブルーマー＝遅咲きの花のことだそうです。つまり、稼働能力がないわけじゃないですよ、と言っているんですね。しかも、「流行語大賞とります」とか大々的に言っていて、心底、気持ち悪い。稼働能力がないとラベリングされることへの抵抗は、わからなくはないです。でも、稼働能力の有無で人が選別されていること自体、ほんとうはおかしい。

それと同じことは、不登校やひきこもりが病気か／病気じゃないか、という図式にも言えるでしょうね。病気だというと、親も「自分の育て方のせいではなかった」と解放される面がある。発達障害でも、脳機能障害だとされることで、そういう側面はあったでしょう。でも、その線引き自体を問わないといけない。でも、なかなか、そこ

が伝わらないもどかしさがありますね……なんででしょう？

貴戸：うーん、でもそれが伝わらないのは私はわかる気がします。づら研（生きづらさからの当事者研究会／毎月1回フォロで開催）をやっていると思うのですが、「稼働能力の有無で線引きするな」というのは、いま現在生きづらい若い人にとっては、「稼働能力がなくてもいいじゃないか」「あきらめて、降りてしまえばいいじゃないか」ということです。これは20代にはなかなか受け入れがたいんじゃないでしょうか。頭で理解することはできても、すんと胸に落ちていかない。降りた先が魅力的だととても思えないからです。それは、私も5年ほど前の20代のことを思えば、とてもわかるんですね。

私も、居場所のなかで人とつながって、かつ食っていけるという方向を紡ぎたいです。20歳を過ぎても、30歳を過ぎても、居場所につながりながら生きて、それを心から魅力的だと本人が思えたらいい。ただ、20歳を過ぎた人たちは、子どもとはちがって、「ありのままがいい」という存在の承認だけでなく、「自分の生きる道はこれで、その道でステップアップしている」という業績の承認が必要だろうという気がします。業績の承認は、今「お金」という鉄壁の尺度でなされてしまっていますが、本来金にならなくても、仕事を積み上げていく喜びとか、プランを立てて行動を起こして成果を手にするプロセスとかを経験することはできるはずですよ。自分がやったことを正当に評価してくれる人がいて、「ここはいい」とか「ここはダメ」とかいうアドバイスをもらいながら、試行錯誤していくうちにだんだんできるようになっていくこと。そういう経験を通じて、理屈じゃなく、自信や誇りを持っていく。それは、「できてもできなくても、あなたはあなただ」という存在レベルの承認とは別次元のものですね。そういう業績レベルで承認される機会が、若い人に閉ざされていることのほうが、たんにお金を稼いでいないということよりも、私は引っかけます。もちろん、そのためには、まずは存在レベルでの承認が満たされることが必要だと思いますが。

山下：業績の世界が流動化しているから、企業でも、時間をかけて正社員を育てるのではなく、即戦力ばかりを求めている、すぐクビになったり、自分で辞めてしまうでしょう。先ほども話にあがりましたが、業績が積み上がっていく世界はパイが縮小していて、内実も劣化しているわけですよ。

フリースクールで積み上げてきたものも、カネにはならないけど、という領域です。いまは、そこに希望が見えないからしんどい。私も、人が存在承認だけで生きていけるなんて思ってないけど、業績の承認も、質の問題がありますよね。どういう価値尺度で業績が評価されるのか。たとえば本を書いたって、販売部数だけで評価されたらしんどいでしょう。

貴戸：業績承認をお金によってではなく、共同性のなかで承認していく方向性を目指すんです。

山下：それは大事な方向性だと思います。ただ、気をつけないと、一発逆転的な発想になって、強迫的な自己実現に悩まされたりしますからね。学校に行かなくても、こんなに充実した人生を送ってます、みたいな。それよりも、まあ、ちょぼちょぼ、ぼちぼちでも生きていける、日々、日常のよろもろが味わっていただけることも大事なかなと思っています。

（同席のスタッフから、「いろいろあるけど、毎日楽しいですよ」という声があった。）

貴戸：そうか……ここのスタッフは毎日楽しそうだから、フリースクールの人といっしょにごはん食べるとおいしいとか、そういうことって、業績評価がどうのという面を凌駕して大事ですね。

山下：状況の厳しさはあっても希望は持っているんですね。いろいろなカテゴリーが解体されたからこそ、逆につながるところを増やしていけるという面もあると思います。登校／不登校も、稼働能力の有／無も、無化してしまうような、菌の増殖

みたいな居場所の増殖……。

貴戸：また、菌ですか（笑）。

あらためて、自分の直観を鈍らせてはいけないと思いました。それは、誰かと対話するなかでしかできないんですね。研究者や教師という仕事は孤独で、すべてではないけれども、ひとりでもって考えている時間が長いです。いつの間にか、どういものが流通するか、受けいられるか、そういうことを先に考えるようになっていたような気がします。いまの私が伝えたいことをどうやら伝えられるか、と考えていたはずなのに、気をつけないと、受けいられるものを伝えていこうとなってしまうですね。

山下：先日、亡くなった吉本隆明が、言語には「自己表出」と「指示表出」があると言っていましたね。評論家の芹沢俊介は、吉本のひきこもりへの最大の貢献は、自己表出の言葉を発見したことだ、と書いてました（『Fonte』336号「論説」2012年4月15日）。指示表出の言語というのは、他者とコミュニケーションするための言語で、人にどう伝わるか、の部分ですよ。ね。「社会性」と言われるものとも重なる。しかし、それだけが言語とか社会性だと思ったらまちがいだ、と。そこからズレたからこそ、自分のなかで練らないといけなかったりする、自己表出の言葉があるんだと言うんですね。自分のなかで反芻する、内臓感覚の言葉。不登校やひきこもりも、指示表出の部分だけでみたら、ただのマイナスでしかない。しかし、ズレたがゆえに、自分のなかで生じる問いがある。そこにいっしょに立てる領域をつくっていきたい。それをたんに、ズレたから元に戻そうという視点は否定したい。

貴戸：そうですね。そもそも、初発に不登校というカテゴリーでくりだされたような、個人が社会とつながるときに、なぜかつながりにくさを抱えてしまうという部分、教育や社会学の言葉には乗りにくい部分を、私は見たかったんです。そのことを思い出しました（笑）。

私の問題意識は、これまでもこれからも、「社

会とつながるときに時として個人が抱えてしまう圧倒的な違和感」にあります。病気でもない、貧困でもない、わかりやすい理由はないけどどうしても「無理！」という感覚。たぶんそういう違和感を持ってしまう人はどんな社会にもいて、ただ社会のあり方によって、クリアに像を結んだり、ほかの現象にまぎれてぼやっと像がぼけたりするんだと思う。そういう違和感は、とても貴重なものだと思います。「この社会」というものの自明性に、とても豊かなかたちで疑問を差し挟むものだから。

80年代の自分の経験がベースになっている私にとって、不登校はそういう「違和感」にアプローチするうえで外せないキーワードです。ただ、90年代、2000年代に当事者経験を持つもっと若い人たちが、自分の経験をベースに当事者研究を始めるとき、問題設定の仕方やキーワードは、きっと変わってくるでしょう。先ほども言ったように、私は80年代的な運動言説を批判的に検討したけれども、私自身の問題意識はとても80年代的で。次の世代の人たちが私の問題構成に対して持つ不満——それはごいっしょしている「づら研」でも折に触れて示されるものですが——が明確な形になったら、それがきっと、私にとってはもっとも手痛い批判になるような気がしています。「不登校」という問いの切り口が「終わったか」どうかを判断するのは、90年代、2000年代に当事者経験を持つ人たちになるのかもしれませんがね。

今日は気づかされるが多かったです。ありがとうございました。

山下：私も、あらためて、いろいろ気づきがありました。ありがとうございました。

## おわりに

## 貴戸理恵

『不登校は終わらない』という作品は、私にとって、キャリアの出発点であると同時に、それについて考えようとすると凍り付いてしまう「氷点」のようなものです。

そこで扱われているのは、不登校の当事者であった私が研究者としてスタートを切ろうとしたとき、避けては通れなかった問いです。当時の私は、個々の学校に行かなかった人びとの経験を学問の言葉で表現してみたい、そして、学問が生み出した知見を、学校に行かなかった人びとの経験を理解するために役立てたい、と思っていました。「当事者」と「研究者」という二つの顔を持つ私が、何かオリジナルな仕事ができるのであれば、そのあいだに橋を架けることではないか、と感じていました。その作業が成功したのかどうかは分かりません。ただ、この作品によって、私は生まれて初めて、本気で「自分の頭で問いを立て、調べ、考え、着地点をみちびく」という経験をしました。考えて書くことの困難や、知ることや伝えて共有することの喜びを、存分に味わいました。作品づくりの過程で出会った不登校経験を持つ人たちには、人生を変えられるほどの刺激をもらいました。

一方で、この作品は出版後まもなく、強い批判にさらされることになりました。私は自分の作品が未熟であり、たくさんの不足点や限界を抱えていることを自覚していましたから、批判があれば受け入れよう、軌道修正してステップアップしていこうと考えていました。実際に、いま読み返せば、足踏みばかりで前に進めていないところや、えいやっと飛び越えたら踏み出し過ぎてしまったところが目立ちます。けっして完成度の高い作品ではありません。そして、いただいた批判がその後の私の貴重な糧になったことは確かです。けれども、いただいた批判のなかには、私が私の問いを持つことそれ自体を否定するようなものが含まれていました。仕事の未熟さに対する批判なら甘んじて受けようと思いましたが、私は、私自身の問いを手放したくはありませんでした。それは、私が私でなくなることであったからです。批判者と

なった人たちとの一連のやりとりのなかで、私は大切な人たちとの豊かな関係性を失いました。結果的に、私は、私に協力してくれた大切な人々を傷つけることになりました。私の思考を今も凍りつかせるのは、この作品が世に出たことで傷ついた人たちが確かにいた、という動かしがたい事実です。

書かなければよかったのかもしれない。不登校の子どもを守る戦いに水を差してしまったのかもしれない——そう考えた時期もありました。けれども、この作品を通じて新たに出会った当事者や支援者たち、大学院の友人や先輩研究者たちとの対話のなかで、そういう考えもまた傲慢であり、本当に考えるべき自分の仕事の粗さから目を逸らすことになる、と思うようになりました。その後の私が、書くことや調査をすることを断念せずに済んだのは、一重にこれらの人びとのおかげです。

そのなかで、ある人に言われた言葉が、いつも頭の片隅にあります。「書いた物の意味は、これから書く物によって決まる」。それは、『不登校は終わらない』という作品の持つ意味は、完全に確定されてしまったのではなく、その後の私が何を書くか、何を行うか、どんな人や場との関係を築くかによって変わってくる、ということでした。とりかえしは、つく。書くことを断念することによってではなく、書き続けることによって、『不登校は終わらない』はその意味で、私にとってまさに「終わらない」作品になりました。

山下耕平さんは、関西という慣れない土地で鬱屈としていた私に、新しい関係性を開いてくれました。『迷子の時代を生き抜くために』で『不登校は終わらない』をとりあげ、その問題意識を汲んだうえでの批判をくださったことは、一度は閉ざされた不登校運動とのつながりをもう一度回復させるきっかけをいただいたように感じました。この対談も、そうしたつながりのための小さな一歩になっていれば、嬉しいです。

---

## 不登校は終わったのか？

『不登校は終わらない』をめぐる再考対談

2012年7月10日発行

頒 価 200円

著 者 貴戸理恵、山下耕平

発行者 特定非営利活動法人フォロ

〒540-0036

大阪市中央区船越町1-5-1

Tel:06-6946-1507 / Fax:06-6946-1577

E-mail: [communitas@foro.jp](mailto:communitas@foro.jp)

URL:<http://www.foro.jp>

---